第５回　文化交流と文化外交

ここでは「文化交流」と「文化外交」を扱うことから、それぞれの定義についてまず確認し、考察を加えていきたい。

（1）文化交流とは何か

「文化交流」とは何かについて明確な定義があるわけではないとする考え方もある。[1] それは「文化」自体に広義な意味が内包されているからだ。「文化交流」を考える上で「国際交流」「国際文化交流」の２つの用語と同時に考えることは、その内容から見ても意義のあることだ。この三つの用語は、意味の重複があると同時に違いもある。「国際交流」は、ヒト、モノ、カネ、情報の国際移動など、人々による国境を越えた交流の総称。「文化交流」は、交流によって文化が移動、交換される現象と、異文化間の交流の二つの意味があり、国内でも起こりうることだ。

> 文化交流は国と国の交流とは限らない。国内においても文化交流は行われる。異なる文化を持った人々の集団の間で文化要素の交流が行われるのが、文化交流である。[2]

「国際文化交流」は国際的な「文化交流」ということになろう。[3] しかし、重要なことはアイデンティティがなければ、自分の立場がはっきりしないということだ。「国民国家において、国内の文化を一様にする努力」[4] が続けられているようだが、異文化の理解や伝統文化の理解など、むしろその国や地域の独自性が重要視されるべきものである。すなわち、「交流するには自分の文化、伝統が必要である」[5] ことは当然であると言える。

> 文化交流には、文化と文化が出会い、互いに影響しあい、交流しあう、自然発生的な交流と、国、政治機関、民間の企業や団体などが、主体的に実施する交流とがあります。
>
> 日本の場合自然発生的な文化交流は、種々の分野でなされています。

一見文化の交流とは見えない活動の中に、しばしば、日本と世界との実質的な交流が行われます。

たとえば貿易です。（省略）

外国からの輸入品も同様です。（省略）

観光旅行も、見方を変えれば文化交流そのものです。（省略）

政府の実施する事業の中で、「経済協力」あるいは「援助」と呼ばれる、いわゆる「途上国」に資金や技術を供与する仕事も、日本政府の用語例によれば、文化交流とは別のものですが、実際は、文化の出会いと交流を避けて通ることはできません。（省略）

ものと人ばかりではありません。書物や音楽や映像や料理やファッションなどの情報を運ぶ媒体によって、文化は交流します。(6)

整理すれば次のようにも大別してもよいかもしれない。

文化交流は大きく分けてものの考え方の交流と、生活様式の交流、それに学問・芸術の交流の三つのカテゴリーに分けられると思います。(7)

文化交流には、国内交流もあれば国際交流もあり、国内の文化も複数存在すれば、国内外を問わず、異文化理解が必要と言う時には、「自文化との相対的な関係において異文化であり、異文化は自文化に対して異文化である」(8) ことは当然である。さらに、「異文化を自文化に、反対に自文化を異文化に『同化する』ことは含まれていない」(9) のである。このことは国際化の問題についても当てはまることだ。

It is also obvious that internationalization doesn't mean for Japan the abandonment for its own values and ways of life or any loss of identity. (10)

上述のエドウィン・ライシャワーの考え方は文化交流やグローバリゼーションを考える上で、自国の立場をどう考えるかの重要性を提言するものと言え

る。

（2）外交とは何か

「文化外交」はここ数年目にするようになった用語であることから関連のある「外交」「国益」と言った用語についても順次取り上げることとにしたい。まず「外交」の一般的な定義を『広辞苑』（第６版）より見ておこう。

外国との交際。国際間の事柄を交渉で処理すること。[11]

専門書にはどのように定義されているのだろうか。

外交は国民性の反映である。[12]

外交とは、、交渉による国際関係の処理であり、大公使によってこれらの関係が調整され処理される方法であり、外交官の職務あるいは技術である。[13]

その国の地理的、歴史的基盤を踏まえ、その政治目的を達成するために外に対して用いる手段、方法、技術をさす」、、、また外交はその国の有する国力の反映であるともいえよう。、、、元シカゴ大学のハンス・モーゲンソー教授によれば、国力は、地理、自然資源、工業力、軍備、人口、国民性、国民の士気、外交の質、政府の９つの要素に分類できるという。[14]

定義としてもうひとつ『外交フォーラム』より紹介しておきたい。

外交とは、異なる社会の間で、相互の関係を安定させ、問題が生じた場合にはそれを平和的に解決することを目的として行なわれる交際[15]

(3) 外交と国益

「外交」は政治目的を達成するものであるから、その政治目的が何かが重要となろう。一般に政治目的は「国益」が基盤であることは言うまでもないことだ。しかし、この「国益」とは何かを考えると、意外にも明確ではない。「国益」の一般的な定義を『広辞苑』（第６版）より見ておこう。

国の利益。国利。[16]

もう少し具体的な定義を時系列に見てみよう。

今日では「国益」概念は、一方で、対外政策を構成する価値の複合体を最も包括的に表現するものとして、一国の対外行動のよりどころや目的、その適合性を認識、記述、説明、評価するのに用いられ、他方で、ある政策の正当化や非難の道具としてひろく利用されている。前者の側面で使われる場合の認識象徴としての「国益」とよび、後者の側面で使われる場合を組織象徴としての「国益」とよんで、一応この概念の機能を区別して考えることが必要であろう。[17]

[英] national interest

国益は国家が政策を決定する「基準」である。ハンス・モーゲンソー Hans Morgenthau は、国益を国家がしたがうべき「１つの指針、１つの思考基準、１つの行動規範」と定義し、国家の対外政策は純粋な「国益」に基づいて決定されるべきであると主張している。国際政治の現実主義(realism)では、国家は合理的なアクターとして想定されるために行動を取ると考える。[18]

外交について考えるに当たっては、何が国益かを考えることつねに必要であるが、簡単なようで、実は、それを見極めることはなかなか困難な作業である。国益というものを短期的なものとして捉えるか、長期的なものとして捉えるかによっても、違う結論が出てくるだろう。[19]

国家にとって国益ほど重要な言葉はない、ということである。国益は国家の対外行動を決定する最大の要素である。(20)

外交を考えるには国益を考えなければならいということだ。しかし、その国益の定義は長期的なものと短期的なもの、さらには時代によっても大きく異なること、さらには国内事情だけでなく、国際情勢とも大いに関連してくるだけに、難しいと言わざるを得ない。

国益と外交について内閣府／財団法人日本総合研究所『国民経済協力の効率化のための官民パートナーシップの検討調査　報告書』(2000) に注目してみたい。まず、国益については以下のように述べている。

「国益」とは、非常に漠然とした概念である。国益の考え方は、これまでの時代的背景や文脈の中で大きな変遷を経てきた。

そもそも、国益は学問的な定義づけが行われる前に、まず政治家によって現実政治の中で用いられたのがはじめと言われている。そのため、国益の概念が非常に曖昧なものとなってしまった。また、国益は英語の“National Interest”に相当するが、これは「国民的利益」あるいは「国家的利益」二通りの解釈が可能である。つまり、“National”からくる視点を主要な構成要素である「国民」に置くのか、あるいは構成物全体としての「国家」に置くかという基本姿勢の問題が存在する。(21)

同報告書ではモーゲンソーの定義について触れたあと、ドナルド・E・ネクタライン(Donald Edwin Nuechterlein, 1925-)の定義を紹介している。ネクタラインは *United States National Interests in Changing World* (1973)を発表し、鹿島平和研究所訳『変化する世界とアメリカ』(鹿島出版会、1976年1月）として日本でも紹介されている。

ネクタラインによれば、不変の国益には大まかに「国防」、「経済」及

び「世界秩序」が三つがあるとされる。[22]

日本の国益については、政府自体もほとんど定義らしきものを提示していない。ここではさらに日本の国益については以下のように触れている。

> 経済的国的とは、一国の貿易ないしはその他の国際的経済活動を通じて、維持拡大する利益を言う。現代の日本はこの利益を最も重視している。[23]

最後に同報告書の「我が国の『国益』とは」から２ケ所を引用しておきたい。

> 我が国の不変的な国益のうち最も重要と考えられる国防的利益とは、日本の物理的、政治的、文化的統合性を保持することであり、これは国家存立条件としてのナショナル・ミニマム（国家の最小限度の義務）を意味する。[24]

> 経済的国益は我が国にとってとりわけ重要であり、特に戦後以降、我が国の外交の中心的な存在となっている。具体的には、市場、資源の安定確保と、その海路の確保である。特に日本は資源が少なくその多くを海外に依存している。そのため、国力の分野に集中的に投入され、資源の安定供給が日本にとって重要な外交課題となっている。いわゆる「資源外交」が正当性をもつ根拠となっている。所以であるが、ここでも「アジア」の重要性は明らかである（市場開拓、資源供給、海路確保）。[25]

同報告書では日本の国益として「経済」に注目しているが、クール・ジャパンをデジタルコンテンツ産業からそのソフト・パワーを活用しようとする経済産業省の動きとも一致するものである。

（4）文化の戦略

最近よく耳にする言葉に「戦略」がある。2009 年 9 月 18 日には民主党を中心とする新政権発足により国家戦略室が設置されたことは周知の通りだ。[26] もともとは『孫子』(BC.5 中頃-BC.4 中頃）にその概念は使用され、ヨーロッパではクセノフォン(Xenophon, BC.430 頃－BC.345 頃)が軍隊で strategos, strategia を用いて、現在の「戦略」(strategy)の語源になったと言われている。もともとは軍事の分野で使用されていた言葉も現在では組織論として用いられるテクニカル・タームとなっている。[27] 文化交流においても一種戦略的文化交流という意味で「文化外交」という言葉が外務省を中心に積極的に用いられている。

①文化発信戦略に関する懇談会について

2007 年 12 月 18 日、文化庁長官裁定により文化発信戦略に関する懇談会が発足した。その趣旨は以下の通りである。

> グローバル化の進展により、伝統芸能から現代の文化まで、多様な現代日本の文化を発信して魅力ある日本の姿を伝え、日本に対する諸外国の理解を深めることが強く求められている。また、そのことが、ひいては日本の文化芸能の振興にもつながる。このような状況な中、日本文化の総体や分野ごとの現状を把握した上で、効果的に発信する仕組みを構築していく必要がある。そこで、有識者による懇談会を開催し、日本文化の現状を明らかにするとともに、「日本の国際文化交流・協力を通じた文化発信の戦略を総合的に検討することとする。[28]

日本の文化の戦略の特徴は「発信」の部分であろうか。かつてのジャポニスムにしろ、クール・ジャパンにしろ、日本文化に対する関心が寄せられているが、理解が高まっていない。従って、「伝統を有する独創的な文化を広く世界に発信することにより、我が国に対する理解を深めること」[28] が求められよう。

文化発信戦略に関する懇談会のおもなメンバーを以下の通りである。

座長　山内昌之
顧問　遠山敦子
顧問　平山郁夫
顧問　福原義春
顧問　山崎正和

②日本文化への理解と関心を高めるための文化発信の取組について』

文化庁「文化発信戦略に関する懇談会」（2007～2009）の内容をまとめたのが 2009 年 3 月に発表された報告『日本文化への理解と関心を高めるための文化発信の取組について』である。

「文化発信の意義」には古くはジャポニスム、最近の事象ではクール・ジャパンについて触れながら、次のように述べている。

> 現代文化は古くからの優れた伝統文化の蓄積の上に成立する連続性をを持った存在であるにもかかわらず、ともすれば断片的・部分的にしか世界には知られていないのが現状である。
>
> 日本の悠久の歴史の中で蓄積されてきた重層的な文化が、総体として、より広く、より多様に世界に発信されていくならば、さらに多くの人々から、日本そして日本文化への永続的な関心や理解、そして憧憬をも得ることができるものと確信する。(30)

「世界には知られていないのが現状」とある通り、

> 国をあげて戦略的に文化発信を推進するとともに、そのために必要な基盤整備を進めることが重要な課題である (31)

と、言うことだ。日本文化発信の考え方はついに小学校教育に入り込んでいる。外国語活動用の教材として開発された『英語ノート２』（文部科学省、2009）には「世界に発信する日本の文化」として以下のものが紹介されている。(32)

相撲、茶道、浮世絵、歌舞伎、華道、柔道、書道、落語

ここでは伝統文化のみが取り上げられている。現代文化を代表するものはない。では、文化発信の推進のために必要な基盤整備を進めるための取組とは何であろうか。同報告書には以下３点を指摘している。

Ⅰ　世界への文化発信の重点的な取組の推進
Ⅱ　国内における日本文化紹介の充実・強化
Ⅲ　日本文化を世界へ発信するための国内体制の整備

発信するべき文化としては「日本文化を伝統文化から現代文化まで」(33)が取り上げられている。こうした文化発信戦略は、文化外交、パブリック・ディプロマシーとセットとなってはじめて最大限にその効果があげられるのだ。文化発信戦略は「社会の活性化や経済振興」(34)に資するだけに現在のように経済が停滞している日本には必要なものかもしれない。

（5）文化外交とは何か

外交で文化が重要視されはじめたのはいつ頃からであろうか。

日本において「文化外交」はおもに戦後期の言葉であるが、戦前の情報統制や文化統制の歴史に加え、戦後は経済協力や開発援助を重視してきた背景もあり、文化をパワーとして捉えることには慎重ないし消極的だった。国際文化交流・協力事業を博愛主義的な慈善活動や啓蒙主義的な異文化理解活動と見なす向きが強かったせいか、あるいは、国益推進にとっては周辺的、二次的なサービスにすぎないとみなされてきせいか、日本の文化外交のスケールは、その経済規模や他の主要先進国に比して驚くほど小さい。外交目標とのリンケージが弱い分、文化外交そのものもソフトパワーとしての戦略性に乏しく、総花的な

印象を受けることも少なくない。(35)

日本政府が文化交流、外交をどのように取り扱っているのは重要である。

①文化外交への流れ

2001 年の中央省庁等改革により国際文化交流に関して外務省と文化庁の役割が明確化された。これにより文化庁は国際文化交流、外務省及び国際交流基金は外交に資する文化交流に特化されるに至った。その後、2004 年には外務省機構にほり、対外広報ト国際文化交流が部分的に再統合され、広報文化交流部が新設された。英語名は Public Diplomacy Department。そのおもな職務は長中期目標の設定及び対外文化交流の戦略の策定であり、国際交流基金は事業の実施となった。これ以後、日本でも「文化外交」なる用語がよく見受けられるようになった。

2010 年 4 月 27 日段階の外務省ホームページの「文化外交（海外広報・文化交流）の「文化の交流」には次のように示されている。

> 文化は、政治、経済と並ぶわが国外交の重要な分野であり、その果たす役割は近年ますます大きくなっています。
>
> 互いに異なる背景を持つ人々や文化の間の交流から生まれる相互理解は、 国と国、人と人との信頼関係を育て友好関係を発達させていく上で、不可欠の要素です。また、様々な側面を持つ日本の姿を世界の人々に十分に理解してもらうことは、グローバル化した世界の中において我々日本人が国境を越えた活動を行い、世界の人々との交流をスムーズに進めていく上で、非常に重要といえます。
>
> 政府は、このような視点から、文化の分野での交流や協力を多岐にわたり展開するとともに、民間団体の国際交流活動を積極的に支援している。(36)

②「文化交流の平和国家」日本の創造を』

2005 年 7 月に文化外交の推進に関する懇談会報告書として『「文化交流の

平和国家」日本の創造を』が発表された。(座長に青木保（1938－)、顧問に平山郁夫（1930-2009)、山崎正和（1934-)、他に14名のメンバーで構成されている。2004年12月7日に第1回懇談会が開催され、2005年7月まで合計7回行われ、小泉純一郎総理（当時）に青木座長より手交。その内容は以下の通りである。

はじめに
第1章　今なぜ文化外交か
第2章　文化外交の3つの理念と3つの柱
第3章　明確な文化外交戦略を
終わりに
（資料）文化外交の推進に関する懇談会の開催について
各会合で議論されたテーマ

「はじめに」には3つの基本理念について述べている。

本報告書では、今なぜ文化外交という視点が必要なのかについて述べると共に、文化外交の「発信」・「受容」・「共生」の3つの基本理念とそれを実現するための行動指針、さらに文化外交を推進するための体制や重点地域等について、課題と戦略を提言している。(37)

「第2章　文化外交の3つの理念と3つの柱」では3つの基本理念についてさらに述べられている。

<u>3つの基本理念</u>
1．発信：文化発信を通した「21世紀型クール」の提示
2．受容：文化創造の場の育成につながる「創造的受容」
3．共生：「多様な文化や価値の間の架け橋」としての貢献(38)

第1の柱については、特に「ジャパン・クール」について触れているので取

り上げておきたい。

「クール」とは「かっこいい」という意味である。日本のマンガ、アニメ、ゲーム、音楽、映画、ドラマといったポップカルチャーや現代アート、文学作品、舞台芸術等は「ジャパン・クール」と呼ばれ、世界の若者世代の人気を博している。また、食やファッションに代表される日本の生活文化も海外で幅広く普及している。しかし日本が文化交流を通して伝え発信していく魅力は、単にそれがかっこいいということにとどまるものではない。ジャパニメーション（日本のアニメ）が、まさに日本の現代文化は、伝統文化をその基礎・背景として持っているからこそ、「クール」たりえるといことができる。(39)

③「文化外交の新発想―みなさんの力を求めています」

2006 年 4 月 28 日に当時の外務大臣・麻生太郎(1940-)はデジタルハリウッド大学での演説「文化外交の新発想―みなさんの力を求めています」の中で、漫画やアニメといったポップ・カルチャーを文化外交を進める上で大いに利用していきたいとの内容が盛り込まれていた。そのおもな内容は以下の通りである。

1　無形遺産条約の発効
2　コンテンツ業界の皆さんへ
3　ポパイとアトムの力
4　ポップカルチャーに本気
5　外交、イメージ、ブランド
6　テレビ海外放送への期待
7　官民のパートナー・シップ
8　オールジャパンの取り組み
9　「賞」をつくります
10　日本の夢を売りましょう

「4　ポップカルチャーに本気」のところでは以下のように述べている。

漫画の話をし始めますと、私の場合きりがなくなるのでここらでやめておきますが、外交というものは外交官同士、秘密の交渉をし、おしゃれな会話をして進めることだという古い固定観念は、この際きれいさっぱり捨ててください。
「日本」とか、「ジャパン」と聞いて、「ぱっ」と浮かぶイメージ。それが明るい、暖かい、あるいはカッコいいとかクールなものですと、長い目で見たとき、日本の意見はそれだけ通りやすくなります。つまり、日本の外交がじわりじわり、うまく行くようになるわけです。(40)

さらに、次のように進んでいる。

ですからわれわれ、こういう素晴らしい伝統文化をこれからもどしどし広めていくつもりですが、お能や文楽、お茶、お花というアイテムに加え、たいへんアピール力のある新しい文化というものが、幸いなことに日本には備わっておりました。それがアニメや音楽、ファッションといったポップカルチャーでして、これをいわゆる「売り込んでいく」ということに、外務省としてはいよいよ本腰を入れて参ります。(41)

「6　テレビ海外放送への期待」の中では以下のように述べている。

わたしどもみな、シェークスピアやベートーベンといった西欧発の文化を糧として成長しました。しかし今では、マンガやアニメ、あるいは日本食や相撲といったメイドインジャパンの文化が、負けず劣らず世界の人々の、特に若い世代の糧になっています。それを、生かさない手はないということなのです。(42)

なお、直接クール・ジャパンという用語は用いられていない。また、「9　『賞』をつくります」は、後述の「国際漫画賞」のことである。

④国際漫画賞

外務省は2007年5月22日に国際漫画賞の創設について発表した。当時の外務大臣は麻生太郎である。以下、ホームページよりその内容を紹介しておきたい。

> ポップカルチャーの文化外交への活用の一環として、海外で漫画文化の普及活動に貢献する漫画作家を顕彰するため「国際漫画賞」(International MANGA Award)を創設することとし、今般「第1回国際漫画賞実行委員会」が発足した。同実行委員会は、外務大臣を委員長とし、（独）国際交流基金理事長及び海外交流審議会・ポップカルチャー専門部会委員から構成される。 なお、本賞の実施にあたっては、（社）日本漫画家協会より選考委員の派遣などで協力を得ることとしている。
>
> 募集作品の中で、最優秀作品に「国際漫画賞」を、その他の優秀な3作品程度に「国際漫画賞奨励賞」を授賞し、それぞれ表彰状及びトロフィー等を贈呈する。また、（独）国際交流基金が、授賞式にあわせて、受賞者を10日間程度招聘し、日本の漫画家との懇談、出版社等への表敬訪問等を行う。
>
> 本賞は、麻生大臣の文化外交に関する政策スピーチ「文化外交の新発想～皆さんの力を求めています～」（平成18年4月28日）でのアイデアを具体化したものであり、本賞の実施により海外の漫画作家の日本文化に対する理解を一層高めることができると期待される。[43]

文化外交の新発想という視点から生まれたようであるが、外務省がすべき事業なのかは疑問も残るところだ。国際交流基金、文部科学省、文化庁などもっと取り扱うのに相応しい機関があるように思われるが、「外交」という言葉で外務省が創設したということになるのだろうか。国際漫画賞は海外でも現在では認知されている。

The same year (2007) we were doing the seminar circuit in Japan, the Ministry of Foreign Affairs of Japan, with a view to raising awareness of the attractions of Japanese contemporary culture, established the International Manga Award, which was designed to honor manga artists who contributed to the promotion of manga overseas. There were 146 entries from twenty-six countries all over the world, including fifteen entries from the UK. The scheme was the result of an idea raised in a policy speech on cultural diplomacy, "A New Look at Cultural Diplomacy: A Call to Japan's Cultural Practitioners," delivered on April 28, 2006 by the foreign minister Taro Aso. This award was significant, as it was an official recognition that manga artists could be non-Japanese. (44)

言及は他の個所でも見られるのだ。

注

(1) 加藤淳平『日本の文化交流』(サイマル出版会、1988 年 10 月), p.4.
(2) 平野健一郎「まえがき」(平野健一郎編『国際文化交流の政治経済学』勁草書房、1999 年 4 月), p.ii.
(3) 平野健一郎「国際関係のなかの国際文化交流」(『国際問題』第 421 号、財団法人日本国際問題研究所、1995 年 4 月), pp.4-5.
(4) 平野健一郎「まえがき」, p.ii.
(5) 光田明正『「国際化」とは何か』(玉川大学出版部、1999 年 2 月), p.124.
(6) 加藤淳平『文化の戦略』(中央公論社、1996 年 12 月), pp.57-59.
(7) 加藤淳平『日本の文化交流』, p.5.
(8) 飛田就一「異文化理解の構造」(筧文生・飛田就一編『国際化と異文化理解』法律文化社、1990 年 1 月), p.20.
(9) Ibid., p.22.
(10) Reischauer, Edwin O., translated by Masao Kunihiro. *The Meaning*

of Internationalization (Tokyo: Charles E. Tuttle, 1988), p.36

(11) 新村出編『広辞苑』（第6版）(岩波書店、2008年1月), p.458.

(12) 武田龍夫『世界の外交』（サイマル出版会、1994年4月）, p.194.

(13) H.ニコルソン／斎藤真・深谷満雄訳『外交』（東京大学出版会、1968年9月）, p.7.

(14) 池井優『増補　日本外交史概説』(慶應通信、1982年6月増補版）, p.1.

(15) 中西寛「外交とは何か―異なる社会の共存の作法」（『外交フォーラム』通巻226号、都市出版、2007年5月）, p.44.

(16)『広辞苑』, p.963.

(17) 高柳先男『パワー・ポリティクス』(有信堂高文社、1991年7月)、p.95.

(18) 大澤淳「国益」（猪口孝編『国際政治事典』弘文堂、2005年12月）, p.321.

(19) 大江博『外交と国益』日本放送出版協会、2007年7月）, p.14.

(20) 小原雅博『国益と外交』日本経済新聞社、2007年10月）, p.11.

(21) 内閣府／財団法人日本総合研究所『国民経済協力の効率化のための官民パートナーシップの検討調査　報告書』(内閣府／財団法人日本総合研究所、2000年3月）, p.1.

(22) Ibid., p.3.

(23) Ditto.

(24)『国民経済協力の効率化のための官民パートナーシップの検討調査　報告書』, p4

(25) Ibid., p. 4.

(26) 「国家戦略室」(http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kokkasenryaku/)（2009年11月22日）

(27) 菊澤研宗『戦略の不条理』（光文社、2009年10月)、p.11.

(28) 文化発信戦略に関する懇談会『日本文化への理解と関心を高めるた めの文化発信の取組について』（文化庁、2009年3月）(http:/www.bunka.bunkashingikai/konadnkaitou/bunkahasshin/)の「資料」より。

(29) Ibid., p.2.

(30) Ibid., p.1.

(31) Ibid., p.2.
(32) 『英語ノート２』（文部科学省、2009 年 4 月）、p.64.
(33) 『日本文化への理解と関心を高めるための文化発信の取組について』、p.10.
(34) Ibid., p.17.
(35) 渡辺靖「日本らしさとは何か―アイデンティティと文化外交」（『外交フォーラム』通巻第 252 号、都市出版、2009 年 7 月）, p.12.
(36)「外務省ホームページ」
(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/koryu/index.html 2010 年 4 月 27 日）
(37) 文化外交の推進に関する懇談会報告書『「文化交流の平和国家」日本の創造を』（2005 年 7 月）, p.1.
(38) Ibid., p.7.
(39) Ibid., pp.7-8.
(40) 「文化外交の新発想―みなさんの力を求めています」
(http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/enzetsu/18/easo_0428.html)
(41) Ditto.
(42) Ditto.
(43) 「文化外交の推進に関する報告書について」
(http://www.mofa.go.jp/Mofaj/gaiko/culture/topics/kondankai.html)
「『国際漫画賞』の創設について」
(http:/www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/h19/5/1173498_804.
(44) Emma Hayley. “Manga Shakespeare”. Toni Johnson-Woods, editor. *Manga: An Anthology of Global and Cultural Perspectives* (Continuum, 2010), pp.277-278.